

日本農民詩史

中卷(二)

松永

松永伍一著

日本農民詩史

中卷(二)

法政大学
出版局

著者略歴

詩人，1930年4月福岡県に生る。八女高校卒業後，ただちに村の中学教師となり，八年間勤務，1957年4月上京，文筆生活に入る。詩論および民俗学的評論などを多く発表。

〔著書〕

「草の城壁」（母音社刊），「くまそ唄」（国文社刊）などの詩集のほか「陽気な農民たち」（未来社刊），「日本の子守唄」（紀伊国屋書店），「望郷の詩」「日本のナシ・ナリズム」「底辺の美学」（大和書房刊），「日本人の愛の唄」（新興出版社刊），「荘厳なる詩祭」（徳間書店刊），「土塊のうた」（新潮社刊）など十数冊がある。

現住所 東京都練馬区上石神井1-355



日本農民詩史 中巻（1）

1968年12月10日	初版第1刷発行	定価 1,800円
1970年8月15日	第2刷発行	

著 者 松 永 伍 一

発行者 相 島 敏 夫

東京都港区南麻布2-8-4

発行所 法政大学出版局

電話・東京453-0717／振替・東京95814番

三和印刷／鈴木製本

落丁・乱丁の場合はお取替えいたします。

は し が き

『日本農民詩史』上巻が出たあと、おもいがけずいくつかの好意的な批評を得た。珍らしい研究という仕事の性格そのものへの好奇心もそれらの評者のどこかに潜在していたろうが、十年間の調べのあとに書いたものだけに私はそれらの評価を素直に受けた。

やらねばならない、といった悲壮な使命感などはなかったが、中巻の執筆にかかってから、いささかそういうものが頭を拾ってきたのでそれを冷酷におさえようと努め、別の仕事をやりたりして最初の刊行計画を大幅に控へたくらいである。誰もかつて手がけなかった作業とはいえ、使命感など持つべきではなかった。しかし、持つてならないものを持つまいとするたかいが、結果として私を精神的に疲労させたことも事実だった。はじめ自分に賭けを要求したその仕事がおみやげに疲労をあてがうなどという莫迦げた仕打ちに出ると、私はここで逃げてはならぬという意地っ張りな構えを見せはじめ、春と夏をがむしゃらに書いた。折から、大切な農民詩集六冊が借りだした詩書蒐集家のもとからついに返ってこないというまったく不愉快な事件がおこった。蒐集家に対する煮えたぎる怒りは、古書の高値に対するのおなじく文化財の私物化に対する公憤へと変わりつつある。私は昭和、元禄という奇妙な時代に生きている。その規定はともかく、昭和とは何だろうかと問わねばならぬ時

期にいて、それを問おうとしない一般的空氣と対峙する態度が求められるとき、私は、激動する昭和を民衆という鏡に映し出してみようとしていたのである。私の生まれた農村恐慌の年を中心に、ゆれやまぬ人間の意思や行動を書こうとすると、いきおい思想論に駆けこまねばならぬ悪いコースが目の前にひらける。明確な価値判断をくだすさわやかな名刀を私も欲しいとおもうが、言語表現を通じて一つの時代相の意味を問うていくとき、思想論のテコが効きすぎると、白か黒かのいずれかを選ぶことですべてが見事に完結してしまうおそれがある。民衆の問題は思想家の問題とそのままイコールではない。その相互の融合と断絶を、言語表現の追求を通じていかに実体的にとらえるかが私のねらいであり、方法であった。

たとえば昭和初期のアナキズムとマルキシズムの対立でも、白か黒かで処理すれば事は簡単である。この異母兄弟というべき思想の系脈が、表現者をどうひきつけたか、表現内容に逆に思想体系がどう影響を与えたかという関係をみるならば、双方を充分に吟味しなければならないはずだが、この仲の悪い異母兄弟は五十年このかた相手をまるで信頼していない。マルキシズムの申し子たちはアナキズムに立つ仕事を一切捨てて公式性にもたれかかり、アナキズムでないと夜も明けない自称アナキストたちは相手のその公式性を権力主義の産物ということかで否定するというもう一つの公式性のとりこになって孤塁を守っているかのようである。民衆にとっては、アナキズムでなければならぬという絶対的な信念もなかったとおなじくマルキシズム万歳でもなかった、その無自覚といっしょに生産があり、生活があり、いのちの授受のいとなみがあった。その野太さと弱さに目覚めた層が表現者の道を歩もうとしたのだが、ときとしてアナキズムの路線でものを言い、ときとしてマルキシズムへの信仰に殉ずる像でものを書いたが、かれらもいつかまた情況の変化に見合う形で転換をみずから迫られたのである。その無数の事例を私は見た。戦闘的・革命的アナキストやマルキシストがそれぞれ表現者であったことでのよ

うに転向を文学化したか、そしてその転向のおちゆくさが民衆一般の生活感覚や社会観・国家観とどういう相関関係をもつことになったか、そのところが私の関心の的となった。つまり思想的突出部分と鬱屈しているパトスとの分離と抱合関係が、昭和の激闘の時代に典型的に見られるのだ。農民詩という媒体を通して、民衆の志向や感受性の表層にせり出てきた数知れぬ表現者たちの眼と心から、パトスの呼吸をわずかなりと読者にかぎとってもらえたらさいわいだとおもう。

さきに述べたような疲労のあとに、実証性を強調しようと努めたため紙幅をとりすぎて予定より五百枚超過し不本意ながら中巻を二分冊にせざるを得なかったことを、詫びねばなるまい。しかし数えきれぬほどもらった読者からの激励と感動の手紙が、上巻の明治・大正という広範囲のモチーフに対してであったことをおもうと、この中巻は期待をよせてくださった方々に対して幾分なりとも報いることができるのではないかと、ひそかに自負の念も抱いているのだが。

一九六八年 盛夏

松 永 伍 一

例 言

一、この中巻（一、二）は主として昭和元年から十六年頃まで約十五年間を取材範囲としたものである。

二、中巻を二分冊にし、（一）を第一編から第四編まで、（二）を第五編から第七編までとした。

一、最初は二十年八月の終戦までを計画していたが、膨大化するおそれがあったので、下巻を昭和後期（太平洋戦争以降）として編むことにした。

一、上巻で作品の引用をしたとき（中略）などで読者から不満が出たので、できるだけ作品は一編完全な形で引用することにした。

一、登場する詩人のうち、とくに重要な人物については略歴や著作などを細かく註として記述したが、本人がすでに死亡している場合調査が行きとどかなかった場合もいくつかある。

一、資料の採集その他で協力してもらった方々を、本書の分にかぎって列挙し、深い感謝を捧げたい。

有島スミエ氏 高木秀吉氏 佐々木義夫氏 藤渕忠一氏 定村比呂志氏 丹生公男氏 重松仁臣氏 真鍋勝見氏 佐藤末治氏 坂本遼氏 上政治氏 中山輝氏 市谷博氏 永楽利英氏 千石あや氏 杉浦盛雄氏 延原大川氏 鈴木武氏 鈴木致一氏 古山信義氏 杉山市五郎氏 細川基氏 白井元嗣氏 上野頼三郎氏 松

沢勉氏 川浦三四郎氏 斎田朋雄氏 泉濠太郎氏 白鳥省吾氏 鈴木勝氏 草野比佐男氏 猪狩拓氏 真壁仁氏
加藤吉治氏 加藤伝氏 鈴木キヲ氏 小坂太郎氏 井上隆明氏 今野賢三氏 高木恭造氏 斎藤彰吾氏 渡辺波
光氏 太田明氏 木村信吉氏 泉浩郎氏 大沢重夫氏 土屋徳子氏 名本栄一氏 石井安一氏 金子洋文氏 山
田清三郎氏 壺井繁治氏 秋山清氏 更科源蔵氏 西野幸三郎氏 加藤愛夫氏 鳥居省三氏 小田トキ氏 友田
多喜雄氏 三万克氏 井上康文氏 松本帆平氏 吉地昌一氏 松村又一氏 堀江末男氏 島田芳文氏 古茂田信
男氏 大野孝氏 赤石茂氏 渋谷定輔氏 田島嘉之氏 大島友次郎氏 及川均氏 中村吉次郎氏 井崎進氏 千
葉宜一氏 益子一彦氏 大桑文彦氏 森荘巳池氏 遠藤奈加志氏 国井淳一氏 石川富子氏 勝又雄一郎氏 鍵
田研一氏 小川猛志氏 榎本菊雄氏 平川俊彦氏 法政大学出版局の諸氏

目次

口 絵 (資料写真)
はしがき
例 言

第一編 激闘の時代

総 章 昭和初年の農村の動向……………	三	
治安維持法の制定と社会運動の弾圧	インテリゲンチユアの指導性と農民の不満	フア
シズムの抬頭	無産政党の得票数と小作人の意志表示の關係	階層別の年間生活費
稲村隆一『農村は何処へ行く』	農民運動の要求の推移	「全農全国会議行動綱領」六
十一カ条	昭和初年の農民運動の概観	地主と小作との構造的關係

第二編 大地舎の詩人たち

第一章 白鳥省吾と『地上楽園』……………二五

『民衆』解体以後 白鳥省吾の人間性 旧来の詩史から消された『地上楽園』 遠藤

奈加志の回想 大地舎「宣言」 白鳥省吾の農民詩と民謡など

(註) 雑誌『地上楽園』掲載の農民詩一覽

第二章 泉 浩郎と胡麻政和……………五一

泉の詩集『曠野の彼方を行く者』から『大地の展望』へ 「阿見原の詩」と原始思慕

「寒村風景」にみる協調主義 最年少の詩人村長 胡麻の『農士詩集』と松村又一の跋

「田園の横顔」と「おらとあをの春」 農民詩観の抽象的な弱さ

(註) 泉浩郎の略歴

第三章 奄美の泉 芳朗……………七三

郷土愛からの出発 「新詩律論概説」より 第二詩集『赭土にうたふ』 「きぬた」と

「百姓の顔」 祖国復帰運動と日本主義への転進

(註) 「新詩律論概説」抄 泉芳朗の略歴

第四章 大沢重夫の生命讃歌……………八七

北海道へ渡る 第一詩集『太陽を慕ひ大地を恋ふる者の歌』 第二詩集『燃ゆる村落』

の世界 「土に生きるイエス篇」 国井淳一の大沢重夫観の限界

(註) 大沢重夫(後沢重雄)の略歴

第五章 さまざまな個性……………一〇二

国井淳一の「買はれて来る子供」 『雑草に埋れつつ』の世界 「首切場」二編の積極

的テーマ 松本文雄と「下野詩人連盟」 『虫のゐどころ』の前後 「馬洗」の弱さ

『からす猫』の柿沼正雄と「地主のやつめ」 井崎すすむ「小豆」 広瀬充の小作人の眼

日下実の「百姓の言葉」と「小作人」 古賀喜八郎の「水揚機械」 島章夫の「鎌をふ

り上げて」 大桑文蔵と佐野量広の詩

(註) 松本文雄の「農民詩への序舌」と略歴

第六章 中村孝助の農民小唄……………一三四

口語短歌への接近 歌集『土の歌』の階級性 農民小唄の特色 大田卯の中村孝助

観 重農主義の限界のなかで

第三編 アナキズムの土壌 その一

第一章 アナキズムと農民詩人……………一四五

民衆の生活感覚と思想体系 理論先行の弊害 ブルードンの思想の唯心論的弱点

バクーニンの三大否定 クロボトキンの日本人思想家に与えた影響 相互扶助の思想と

人類の解放 日本におけるアナキズムの運動 アナキズムの組織と農民詩誌 無政

府共産党事件と農村青年社事件 『弾道』の創刊と当時のアナ・ボル対立 秋田芝夫の

実感主義的農民詩論 「百姓の子太吉」 農民の読む詩と読まない詩 『北緯五十

度』と『彈道』の論争

更科源藏らの都会詩人批判

秋山清の回想

小野十三郎の

論旨

第二章 重農主義芸術運動から……………一七〇

「土の芸術」から「農民文学」へ

「農民文芸会」と加藤武雄の支援

雑誌『農民』の

創刊 反マルキシズム芸術理論

鍵田研一と相田隆太郎の問題提起

加藤一夫のフ

ブローチ

「全国農民芸術連盟」と第三次『農民』

「宣言」の意味するもの

「ブ

ロレタリア文芸批判号」から「ナップ派農民文学撲滅号」へ

「農民自治文化連盟」への脱

皮

アナキストたちの独立

犬田卯のセクト主義

『農民文芸十六講』の「農

民詩に就いて」にみる佐伯郁郎の最初の試み

土屋公平の農民詩の分類

(註)「ナップ派農民文学撲滅号」の論文要旨

全国農民芸術連盟の支部運動方針

第三章 『新興農民詩集』の叫び……………一九一

農民詩発表者氏名

『新興農民詩集』収録作品名

小須田城子の「村の女教員」

加

村喜一の「敗戦の詩」

山本晴士の「俺達はその時を知ってゐる」

田代武雄の「これが

お前にタムける只一つのものだ」

矢口孝志の「山吹は俺の愛馬だ」

大内実の「鯛をさ

げた野良犬」

小山美樹の「搾取」

南条声夫の「小作人」

小田原一郎の「爺様の

輝」

橋口富次郎の「宣言」

北上允の「緑色の旗」

北山杜夫の「三日月の夜の狼

火」

岡羊之介の「沈黙の氾濫」

三村新作の「太陽を断ち切る」

宮崎秀「ウクラ

イナの曠野」とマフノ一揆

マルキシズムにおける権力問題

(註) マフノの農民運動

第四章 『農民詩人』の登場……………

二二一

反マルキシズムの立場

北見千尋の「農民詩の胚胎と動向に就いて」

伊福部隆輝の農

民詩観と泉芳朗の「近代農村の爆発的危機と農民文学」

腰山茂忠の「アナキスト宣言」

大杉幸吉の「歴史を創る」

竹内てるよの「小さい素足」

泉芳朗の「アナキズム文学に

於けるロマンティズムの重要性」

延島英一の理論

山田弥三平の「子におくる」

興津次郎と泉藻太郎の方言詩

経営難の「全日本農民詩人連盟」

『農民詩人』参加者

(註) 『農民詩人』掲載の農民詩論(国井淳一、秋田芝夫)

『農民詩人』目次

第五章 延原大川の転向……………

二五〇

戦闘的な青年

ガリ版詩集『山脈の情熱』の激怒性

「ぶちこんで見ろ」

反マ

ルキシズムの執念

黒住教から高天原研究へ

第二三五郎の詩「僕の手記」

(註) 延原大川の略歴

第六章 伊藤 和と『馬』事件……………

二六二

詩集『泥』の発禁

初期の抒情詩『馬』創刊の動機

田村栄の「高神村蜂起に」と詩「高

神村事件のときの詩」の力動性

伊藤の検挙から裁判まで

保釈後の第一信にみえるア

ナキストの決意

真壁仁の同情

「町へ売る」と「老ぼれめ」

「逆流」と肉親への

反抗 「米を売る話」と「すいか」

レポート「百姓地帯から」の視点

(註) 農村運動に関する鈴木勝宛の書簡

伊藤和の略歴

第七章 鈴木 勝の動向……………二八九

生田春月、中西悟堂との接触 「地上楽園」への参加 「農業倉庫の前に立ちて」と「組

合自治」と「石油発動機」 アナキズムへの接近と『馬』への参加 『馬』編集会議と事

件の発端 『黒牛』発行中止 村会議員となる 伊藤和の不满と鈴木勝の右傾化の

予言 定村比呂志との関係

(註) 「千葉農民自治連盟」の宣言 鈴木勝の略歴

第八章 土屋公平の存在……………三〇八

早熟な少年の虚無 加藤一夫の思想的影響 吉沢武夫との論争 「自治連盟」の

設立とリーフレット『農民』 詩集『新しい地床』出版 「これで決まったといふのか？」

と「原っぱ」 「野天の詩」と佐野嶽夫の批判 西杉夫の評価

(註) 土屋公平の略歴

第九章 定村比呂志の「反逆性」……………三二二

豊津中学の先輩たち 全国農民芸術連盟への参加 個人詩誌『鴉』創刊とスローガン

「自治連合九州準備会」の流産 「血飛沫の田園で！」と「世紀の牢獄」 『廃園の血脈』

の序文と秋山清の批判 詩集『覚書』 個人詩誌『百姓詩人』から『蛙文学』の仕事

稗田村農会時代 砂丘浪三の詩「五月」と「黒い大地に哭す」

(註) 『廃園の血脈』出版の事情 定村比呂志の略歴

第十章 萩原恭次郎の位置……………三四三

伊福部隆輝の評価 萩原恭次郎の詩作期の分類 「畑と人間」からの転進 アナ・

ボル論争の渦中で アナキズムへの志向と『断片』 農村と農民へのおもい 詩」も

うろくづきん」と「婦郷日記」 個人雑誌『クロボトキンを中心にした芸術の研究』の発行

オルグの悲哀 「亜細亜に巨人あり」の世界と死 南小路薫の「村落露営」 塩野筈

三の「雨は夜になって雪になるだらう」 大島友次郎の「私自身を歌ふ」 田島嘉之の

「霜よけの火」

(註) 萩原恭次郎の略歴 『クロボトキンを中心にした芸術の研究』所載の評論

第十一章 『農民小学校』の友情 …………… 三七一

四人の結合 詩誌『農民小学校』の発行とその苦勞 青春の燃焼 古山信義の『土

塊の合掌』と抒情性 「オミヨ」と「この事実」 石川和民の野性的情熱 テクニ

シアンの限界 「血の記念日」の反戦思想と「この道」 詩集『祭』と出征記念号

鈴木武の受けた弾圧 ガリ版詩集『農村細胞の書』の迫力 「夕暮れに就いての覚へ書

き」 逃避と戦争 鈴木致一の「ねずみ」詩編 詩集『蕨』の内容

(註) 古山信義、石川和民、鈴木武、鈴木致一の略歴

第十二章 上野頼三郎の詩と理論 …………… 四〇四

農民詩論集『魅力なき片言』の発行 「詩の潔癖性と其運動」における論理 「牧場ニ

行ッタ牛ノ詩」と「豚」

第十三章 太田 明と木村信吉 …………… 四一四

太田明の土俗文学への関心とアナキズムへの傾斜 『農民詩人』への参加 「彷徨って来

た男」 阿波方言詩の確立へ 木村信吉と横瀬夜雨 口語短歌からの脱皮 『地

上楽園』と『農民詩人』の舞台 個人詩誌『野性芸術』の創刊 詩集『開墾のうた』か
ら

(註) 太田明、木村信吉の略歴

第十四章 名本栄一、西野幸三郎その他……………四三三

宮本武吉の詩の定義 アンソロジー『南海黒色詩集』 起村鶴充の「土に咽ぶ秋」「お

こよの詩」など 木原健の「山から」 『開墾小舎』を出した木原良一 名本栄一の

発禁詩集『飢へてゐる大地』 「曠野に狂ふ」の激昂性 清水貞雄と西野幸三郎の関係

『泥炭地帯』の創刊 藤沢定夫と面激二 西野の「秋の通信」と「故郷からの手紙」

堀江末男の「おかん」への慕情

第四編 ナップの旗の下に

第一章 プロレタリア文学運動……………四六五

小野十三郎と中野重治のアナキスト観 主義と民衆の要求するもの 「プロレタリア文

学運動組織系統図」 『種蒔く人』の仕事と『文芸戦線』の綱領 理論闘争の激化

全日本無産者芸術連盟(ナップ)の結成 蔵原惟人の登場 『戦旗』の創刊までの動き

蔵原の「ナップ芸術家の新しい任務」の影響 ハリコフ会議の決議と日本プロレタリア作家

同盟への要請 農民文学研究会の設立と作品活動

(註) 全日本無産者芸術連盟設立の綱領 日本プロレタリア文化連盟(コップ)の組織

第二章 農民文学の理論……………四九二

蔵原の「農民文学の正しき理解のために」 農民自治派の反論

第三章 『文芸戦線』の農民詩……………五〇一

砂島純吉の「農夫の歌へる」と西本悦の「百姓哀歌」 笛木哀之介の「百姓よ・氣を附け」

石井安一の登場 反戦詩「我が友に送る」 岩淵威夫の「豆畑」「土管の唄」「呻吟」「凶

作」 中西伊之助の『野良に叫ぶ』評 越後谷隆治の「秋風に」「溜息をついてゐる時で

はない」 かれの開墾と「農村雑誌」 高橋辰二の「官林にかこまれた村」

(註) 石井安一の略歴

第四章 ナップ派の叫び (1)……………五三三

中野重治の「歌」が示唆したもの 石井秀の「天の川へ響けるほど」とアナからボルへの転

進 伊藤信吉の「霜」と山田一の「炎天の下で」 木原豹の「別れ」と加納博史の「北

海道移民の歌」 北山雅子の「田をうなひつゝ」と中野鈴子の「わたしの正月」

第五章 ナップ派の叫び (2)……………五六〇

プロレタリア詩人会の結成と『プロレタリア詩』の創刊 プロレタリア・ロマンチズムの

問題 アンソロジー『プロレタリア詩集』と農民詩 上村実彦の「立毛押へに抗して」

大道寺浩一の「最上川の歌」と田中英士の「朝ともなれば」 中田清公の「草刈」と杉沼秀

七の「橋」 『プロレタリア短歌』に集まった農民詩 沖田英夫、乾清一、山根秀一、八

十島民平、沼三郎 内野健児の問題提起